

課題名	6 地域水田農業技術確立試験	分類	②
	水稻品種「キヌヒカリ」の作期別生育特性		
試験研究年次	63～2年(継続)		
I 目的 極早生の良食味品種「キヌヒカリ」の適作期の策定及び作柄の安定向上のために作期別の生育特性を明らかにする。			
II 試験方法			
1 試験実施場所	農総試 農産研究所		
2 供試品種	キヌヒカリ、コシヒカリ(比較)		
3 栽培様式	稚苗移植栽培(苗齢1.5～2.4L)、栽植密度; 30cm×15cm (22.2株/㎡) 施肥窒素量(kg/10a); 全区 5+1.5+1.5		
4 移植時期	4月20～25日、5月6～8日、6月9～10日の3水準		
5 試験の規模	1区15㎡、2区制		
III 主要成果の概要			
キヌヒカリの作期別の生育特性を明らかにした。			
1 生育ステージ; 出穂・成熟期はいずれの移植時期においても、コシヒカリとほぼ同時期である。4月下旬～5月上旬植の早期栽培では移植から出穂期までの日数は80日以上で、7月下旬に出穂期、8月下旬に成熟期となる。6月上旬植の普通期栽培では、移植から出穂期までの日数は65日程度で、8月中旬に出穂期、9月下旬に成熟期となる。主稈葉数はいずれの移植時期においても12枚程度でコシヒカリより0.6～0.9枚少ない。			
2 茎数の推移と穂数; 早期栽培では普通期栽培に比べて生育初期の茎数の増加は緩慢であるが、最高茎数が多く、穂数も多い。キヌヒカリの茎数、穂数はどの移植時期においてもコシヒカリより5～12%少なく移植時期が遅くなるほどその差が大きい。			
3 穂肥施用時における葉色; コシヒカリと同程度である。早期栽培では3.2～3.3まで低下するが、普通期栽培では3.8程度でやや濃い。			
4 耐倒伏性; 稈長はコシヒカリより6～11cm短く、耐倒伏性は勝る。移植時期による稈長の変化は少ない。			
5 登熟と収量性; 1穂当たり穎花数はコシヒカリとあまり差はないが、単位面積当たり穎花数は3～13%少なく、移植時期が遅くなるほどその差が大きい。登熟歩合はコシヒカリより高く、千粒重もやや重い。収量は移植時期が早いほど多く、いずれの移植時期においてもコシヒカリと同程度であるが、コシヒカリの倒伏程度が大きい場合にはキヌヒカリの方が多収になる。			

IV 主要成果の具体的データ

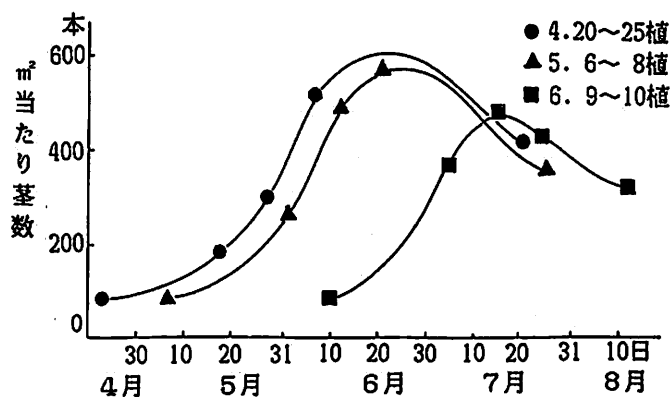
第1表 生育ステージ及び葉数、葉色、稈長

品 種	移植時期	出穂期	成熟期	主稈 葉数	穂肥施用 時の葉色	稈長	倒伏 程度
	月日	月日	月日	L		cm	
キヌヒカリ	4.20~25	7.17~25	8.23~30	12.1	3.2	76	0
	5. 6~ 8	7.22~29	8.29~9.3	12.0	3.3	76	0
	6. 9~10	8.11~13	9.19~23	12.0	3.8	75	0
コシヒカリ	4.20~25	7.18~25	8.22~31	13.0	3.2	82	2.2
	5. 6~ 8	7.23~29	8.30~9.4	12.7	3.4	86	1.4
	6. 9~10	8.11~13	9.21~22	12.6	3.6	84	2.0

注) ①葉色はカラスケールによる群落測定値。②倒伏程度は無~甚を0~5で示す。

第2表 収量構成要素及び収量・品質

品 種	移植時期	穂 数	穎 花 数		登熟 歩合	精玄米 千粒重	精玄米 収 量	検査 等級
			本/㎡	1穂㎡当たり ×100				
キヌヒカリ	4.20~25	418	80	337	86	22.5	638	1下
	5. 6~ 8	360	79	286	92	23.3	598	1下
	6. 9~10	324	80	262	90	23.7	549	1下
コシヒカリ	4.20~25	440	78	349	82	22.3	632	1下
	5. 6~ 8	394	82	325	84	22.8	598	1下
	6. 9~10	367	82	302	80	23.4	560	1下



第1図 茎数の推移

注) 2ヵ年の平均値。移植期、出穂期、成熟期は2ヵ年の幅。主稈葉数は平成元年のみ。

V 成果の評価と取扱上の留意点

作柄の安定向上と品質低下防止のための参考資料とする。

VI 今後の研究上の問題点

作柄向上のための生育診断法

VII 資料名

63~平成元年度 福岡県農業総合試験場 農産研究所 作物栽培研究室 夏作試験成績